

[002]障害史研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4377788>

出版情報：障害史研究. 2, 2021-03-25. Faculty of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

活動報告

〔1〕 科研メンバー

○研究代表者

高野 信治（九州大学比較社会文化研究院・教授）

○研究分担者

有坂 道子（京都橘大学文学部・教授）

大島 明秀（熊本県立大学文学部・准教授）

小林 丈広（同志社大学文学部・教授）

小山 聡子（二松学舎大学文学部・教授）

鈴木 則子（奈良女子大学生活環境科学系・教授）

瀧澤 利行（茨城大学教育学部・教授）

中村 治（大阪府立大学名誉教授・客員研究員）

東 昇（京都府立大学文学部・准教授）

平田 勝政（長崎ウエスレヤン大学現代社会学部・教授）

福田 安典（日本女子大学文学部・教授）

藤本 誠（慶應義塾大学文学部・准教授）

細井 浩志（活水女子大学国際文化学部・教授）

丸本 由美子（金沢大学法学類・准教授）

山下 麻衣（同志社大学商学部・准教授）

山田 巖子（論文は山田巖子）（弘前大学人文社会科学部・教授）

山本 聡美（早稲田大学文学学術院・教授）

吉田 洋一（久留米大学文学部・教授）

○研究協力者

赤司 友徳（九州大学大学文書館・准教授）

クウィーラ・ダーヴィト＝ドミニク（David Dominik CHWILA）（九州大学大学院地球社会統合科学府・博士後期課程）

末森 明夫（国立研究開発法人産業技術総合研究所 バイオメディカル研究部門・主任研究員）

高久 彩（九州大学大学院地球社会統合科学府・博士後期課程）

〔2021年3月現在〕

〔2〕 活動記録

○本科研・障害史研究会

・第2回研究会

2020年6月21日、オンライン

(1) 報告

- 1 「発心の機縁としての病——中世仏教説話に描かれた病と障害——」山本聡美（早稲田大学）本号掲載論文参照
（概要）古代・中世日本において、疾病や障害を「発

心の機縁」として捉える視点が存在していたことを、寺社縁起絵巻や高僧伝絵巻を通じて明らかにした。

質疑応答としては、以下のような事項。絵巻物の詞書きの典拠。善悪の認識・鬼とは何か。自身の後悔・病（瘡）と発心との関係。日本における仏教理解や図像化の意味、病・障害事象が図像化される背景。絵画史の多面的な理解の必要性和絵画成立の文

法理解。蓄財の罪認識と障害。

2 「日本近世医療社会史研究からみた障害者の歴史」鈴木則子（奈良女子大学）

（概要）過去の近世障害者に関する自身の研究内容を紹介した。具体的には論文（横田則子）「近世都市社会と障害者～見世物をめぐって」（脇田修・吉田伸之・塚田孝編『身分的周縁』部落問題研究所、1994年）と論文「〔須佐之男命厄神退治之図』（葛飾北斎画）に描かれた病」（『浮世絵芸術』175号、2018年）でとりあげた江戸時代の障害者見世物の事例および北斎が絵馬に描いた障害者の図像の概要を述べた。

質疑応答としては、盲人免許制度の外にいる見世物小屋の障害者への注目。障害者の生活実態へのアプローチ。障害者と見世物の捉え方、差別・自立の問題。仏教絵巻物にみえる中世の障害者と芸能の繋がり可能性と近世への流れ。見世物興業とお金による罪業払拭。

(2) 打ち合わせ（運営の方針・計画）

・第3回研究会

2020年9月12日、オンライン

(1) 合評会

福田安典「障害史研究（Disability History Studies）のための日本古典文学研究序説」（『障害史研究』1号掲載論文）合評会。概要は本誌掲載

(2) 打ち合わせ（運営の方針・計画）

・第4回研究会

2020年12月26日、オンライン

(1) 報告

1 「城鞠洲の医学・医療観」大島明秀（熊本県立大学）

（概要）主に幕末の肥後で活躍した古方医・城鞠洲の医学・医療観に迫った。鞠洲が天保初年頃に深川

手永で御郡代直触医師を勤めいたこと、後に再春館で教授したことを指摘した。著作は全て所在不明であったが、『鞠洲医事或問』を発見し、その序文から、鞠洲に生まれたこと、医学は古代中国の聖人の遺教とし、よって聖人の教えである漢詩文なども学ばなければならないと考えていたことを明らかにした。次に、これまで知られていなかった鞠洲最晩年の著作『鞠洲医事文稿』三編を発見し、その書誌を述べた上で、本文から、種痘に対して揶揄していた鞠洲の様子や、痘痕による美醜についての記述を挙げ、鞠洲の種痘観に加えて感情史研究の可能性も提示した。以上の報告に対し、江戸時代における鞠洲の種痘観の位置づけ（一般的なのか固有なのか）、人痘の危険性に対する認識が牛痘導入に与えた影響、痘痕の美醜に対する近世人の関心の有無についてなど、今後研究を展開していく上で有益な質問・コメントが多数寄せられた。

2 「江戸時代にみる精神病患者処罰 —— 公事方御定書を中心に」丸本由美子（金沢大学）

（概要）本報告では、江戸時代の裁判記録や法令の文面など、公的な文献中に取り上げられている精神障害者について着目した。特に、公事方御定書では、各種写本を比較するに、現代の言葉では「精神障害」と表現されるであろう状態は主として「乱気」「乱心」という言葉で表現されている。そしてその状態にあって犯した罪については、下巻78条において、罰を減じる対処をとる可能性が想定されている。但し、この条文の実際の運用については、論者によって見解の相違がみられ、実態の解明に当たっては適用事例の更なる収集が必要と考える。各藩法における取り扱いについても今後の課題である。

(2) 打ち合わせ（運営の方針・計画）

○学会報告

- ・2020年9月19日、日本宗教学会第79回学術大会第2部会パネル「陰陽道研究の最前線」、駒澤大学（オンライン報告）、細井浩志「陰陽道の定義とその成立」。
- ・2020年11月7日、福田安典。日本古典籍研究国際

コンソーシアム参加機関によるラウンドテーブルにパネラーとして参加。Zoomによる実施。参加者は、福田のほか、山本嘉孝（国文学研究資料館）、パネラーはバゼル山本登紀子氏（ハワイ大学マノア校図書館）、中村美里（東京大学附属図書館）、

ビュールク・トーヴェ（埼玉大学大学院人文社会科学研究所）。

- 2020年11月14日、日本道教学会第71回大会、立教大学（オンライン報告、共同）、細井浩志・中村琢「『暦林問答集』の新写本について——古谷義昭氏所蔵『暦林問答集』の紹介と検討——」。
- 2020年12月5日、二松学舎大学人文学会第121回大会、二松学舎大学（youtube 配信）、座談会・小山聡子×町泉寿郎×牧角悦子「災異と疫病と呪術」に登壇、小山「もののけと呪術」発表、討議。
- 2020年12月20日、仏教文学会12月例会シンポジウム、椋山女学園大学星が丘キャンパス（オンライン開催）、藤本誠「『日本霊異記』の成立と東アジアの仏教」⇒研究短報参照。
- 2020年12月20日、都市史学会大会シンポジウム、小林丈広「近代都市と「衛生自治」——「貧民部落」をめぐる——」、討論（オンライン開催）
都市史学会は文献史学や建築史の研究者が多く参加する全国学会で、本シンポジウムは世界における感染症の歩みを検証するため、日本史、東洋史、西洋史の研究者が参加して行われた。私は近世から近代にかけての日本の感染症対策を担当し、近世については窮民施療やコレラ祭、種痘の導入

などを紹介した。近代については、以前まとめた小著『近代日本と公衆衛生』の内容に、新たに京都市参事会文書に綴じ込まれた「市医日誌」の情報を加え、防疫の最先端を担う医師の活動を検討した。

- 2021年3月24日、ICCP2020（The 11th International Conference on Cultural Policy Research（第11回文化政策国際会議）、同志社大学、遠隔会議、高久彩“The particularity of the first Japanese Museum Collection: Focusing on the evaluation process for collecting excavated artifacts from 1874 to 1882”、概要：「博物館」（東京国立博物館の前身）の成立が太政官の祭政一致の思想と密接な関係にあったことを明らかにするため、「博物館」と教育博物館（国立科学博物館の前身）を収集・分類・展示の観点から比較し、『埋蔵物録』（東京国立博物館所蔵）を考察することを通じて、「博物館」の特殊性を検討した。
- 日本文学協会主催の「国語・文学教育のこれから——学びの場をつなぐ」という誌上シンポジウムに参加。福田安典。内容は『日本文学』誌で2月に活字化される予定。

○研究会報告

- 2020年9月13日、第十回国際日本文化研究センター共同研究会（オンライン）、鈴木則子「江戸時代のコレラをめぐる生活史」。内容；安政五年コレラに関する日記史料の分析。
- 2020年12月3日、奈良歴史研究会（オンライン）、鈴木則子「駿河国富士郡『袖日記』にみる〈疫病経験〉——安政五年のコレラ流行をめぐる——」、内容；安政5年コレラに関する日記史料の分

析。

- 2020年12月27日、日記研究懇話会（オンライン）、高野信治「夫婦の日記」。広島藩儒者の頼春水・梅颯（静子）夫婦の日記の記載記事にみるジェンダー的差異を指摘。夫婦、とくに静子の日記には子供の病症記事が多く、障害認識へのアプローチが可能と考えられる。本号掲載研究ノート参照。

○講演

- 2020年6月6日、福田安典、ICU高校生企画の「高校生に古典は本当に必要か」というシンポジウムにパネラーとして参加。
- 2020年8月5日、一般社団法人日本経済団体連合

会・21世紀政策研究所、山本聡美「疫病と日本美術——古典知の活用」同研究所員向け講演。古代・中世日本における疫病流行とその対処に関する歴史を、中世絵画を手掛かりにひもとき、現代社会

における古典知活用の有効性について講じた。

- 2020年10月3日、17日、24日、31日、11月21日。瀧澤利行。土浦市民大学「現代に生きる養生論」5回シリーズで講演。近世以降、現代までの養生論の変遷と、現代人の健康づくりや生活のあり方にあたえた影響を基本的考え方、飲食・運動・医療の世界、疾病への考え方、近代の養生論、現代人の生活と養生の5回にわたって講演した。
- 2020年11月21日、俳文学会東京例会・公開講座、深川資料館レクホール、福田安典「平賀源内と松尾芭蕉」
- 2020年11月23日、講座「日本書紀編纂1300年記念シンポジウム『日本書紀』編纂1300年——歴史と文学と——」、奈良県立万葉文化館（奈良県）、細井浩志：基調講演1「『日本書紀』編纂と持統天皇

——天変よりみたその編纂過程——」、座談会（細井浩志・渡邊卓・竹内亮・井上さやか）。

- 2020年11月25日、フランス国立ギメ美術館と日本女子大学をつないでワークショップ。福田安典。日本女子大学の学生が古典籍の文字を読む能力を身につけるカリキュラムを公開したもの。一部公開で実施。
- 2020年11月28日、人権啓発研究第41回兵庫県集会、三田市総合福祉保健センター、小林丈広「都市を色分けすること——疾病と差別の歴史をめぐって——」
- 2020年12月12日、給湯流茶道オンライントークショー、細井浩志「平安貴族の遅刻について」論文Tシャツ販売。

○調査

- 2020年8月4～6日、滋賀県彦根市、岐阜県大垣市における武士祭神調査。とくに、治癒信仰がある御首神社祭神・平将門関連資料収集（大垣市立図書館）、高野信治
- 2021年3月、八重山地方における障害者の処遇についての調査、中村治

[3] 研究短報

○有坂 道子

今年度は、広く「障害」に該当する事例を抽出することを目的として、小石家・百々家など医家の診

療記録と、『時慶卿記』など公家日記（翻刻史料）の読み込みを行った。

○大島 明秀

- 史料紹介
「校訂版『鞠洲医事文稿』三編」、『障害史研究』2号、2021年3月、大島明秀、単著。概要：架蔵本と熊本市後藤是山記念館蔵本を底本とし、城鞠洲『鞠洲医事文稿』三編の校訂版とその読み下し文を作成、さらに解説を付した。

- 城鞠洲に関する基礎的事項を調べるため、複数回にわたって熊本県立図書館にて調査を行ったが、その際に若き日の鞠洲が著した新資料「鞠洲医事或問」を発見した。本資料については全冊写真撮影を行い、翻刻を進めており、来年度に発表する予定である。

○小林 丈広

昨年度に引き続き、留岡幸助、谷三山、熊谷直恭などに関わる調査・研究の中で障害者問題に関する史料の検討を行った。また、障害者史のデータベース

スの基礎となる年表を選ぶため、世界人権問題研究センター編『人権歴史年表』（山川出版社、1999年）の入力に取りかかった。

○小山 聡子

- ・本科研のデータベース「古代・中世疾病観論文リスト」の入力を進めている。
- ・古代・中世における障害者に関する史料を、現在の観点から精神障害とみられる事例を中心に収集している。前近代の疾病感に関する基本書籍や史料集を購入した。
- ・単著
『もののけの日本史——死霊、幽霊、妖怪の1000年』（中央公論新社、2020年11月）総頁数・281頁
- ・論文
「平安時代におけるモノノケの表象と治病」小山聡子編『前近代日本の病気治療と呪術』（思文閣出版、2020年4月）

- ・事典項目
「親鸞」（日本思想史事典編集委員会編『日本思想史事典』丸善出版社、2020年4月）294頁・295頁
- ・エッセイ
「親鸞聖人の時代の往生際 その三 語られた親鸞聖人の往生際」（『ひとりふたり・・・』第155号、2020年6月）5頁～7頁
「親鸞聖人の時代の往生際 その四 親鸞聖人の妻 恵心尼の往生際」（『ひとりふたり・・・』第156号、2020年9月）5頁～7頁
「往生際の日本史 その一 妻を持つということ は」（『ひとりふたり・・・』第157号、2021年1月）5頁～7頁

○末森 明夫

2020年（2020年1月1日～2020年12月20日）は論文「中古中世字書における聾啞吃字彙の受容と変容——聾概念と啞概念の独立性、啞概念と吃概念の連続性」を上梓することにより、中古中世文献にみる聾啞吃語彙の調査が一段落ついた年ではあったものの、『聾史会報／聾啞史会報』に近世および近代文献にみる聾啞吃語彙ないし聾啞関連記述に関する記事を掲載し、近世近代文献にみる聾啞吃語彙の本格的な調査が緒に就いた年でもあった。また論文「日本聾啞教育史の新たな地平と非近代主義——アクターネットワーク論と存在様態論による徳川時代の啞と仕形の再解釈」を上梓することにより、日本聾啞史・日本聾啞教育史と社会学の融合に関する取り組みが緒に就いた年でもあった。この機会に日本障害史における日本聾啞史・日本聾啞教育史の定位を模索する作業に勤しむことにしたい。

【査読学術誌】

- ・末森明夫（2020）「日本聾啞教育史の新たな地平と非近代主義——アクターネットワーク論と存在様態論による徳川時代の啞と仕形の再解釈」『社会学評論』71（3）：411-428.
- ・末森明夫（2020）「中古中世字書における聾啞吃字彙の受容と変容——聾概念と啞概念の独立性、啞概念と吃概念の連続性」『ろう教育科学』62（1）：13-24.
- ・末森明夫（2020）「日本手話〈明日〉の系譜——時間譬喩・複合語短縮・語構成素反転の網状系譜への連関布置」『歴史言語学』9：1-29.
- ・末森明夫（2020）「日本手話および日本語対応手話における *parole/écriture* の共時的ないし通時的考察」『ろう教育科学』62（2）：7-10.

【予稿】

- ・末森明夫（2020）「Saussure 学説にみる手話観の

再解釈——*le langage des sourds-muets* と *sème* にみる多数空間性と線条性」東京：第46回日本手話学会大会。

【記事（査読無）】

- 末森明夫（2020）「『世界転覆奇談』に見られる聾啞表象」『聾史会報』62：15-18.
- 末森明夫（2020）「琉球絵師・自了は聾啞者ではない」『聾史会報』62：19-23.
- 末森明夫（2020）「チーゲー王」『聾史会報』62：24-27.
- 末森明夫（2020）「『ゲンセンカン主人』における

啞表象」『聾史会報』62：28-29.

- 末森明夫（2020）「泉鏡花の短編にみられる不具表象——覽盲啞表象の収斂および放散」『聾史会報』62：30.
- 末森明夫（2020）「聾啞語彙史・手話関連語彙史の射程と地平」『聾啞史会報』63：5-7.
- 末森明夫（2020）「「晒」は「啞」の異体字か？——『龍龕手鑑』における異体字群」『聾啞史会報』64：24-26.
- 末森明夫（2020）「『日本聾啞教育史の新たな地平と非近代主義』補遺」『聾啞史会報』65：27

○鈴木 則子

- 「幕末コレラ史料にみる〈疫病経験〉の歴史」『歴史地理教育』919号、2020年12月、30-35頁
- 「安政五年コレラ流行とおどけ長唄『しに行 三日

- 転愛哀死々」（研究ノート）『人間文化総合科学研究科年報』第36号、49-61頁、2021年3月掲載予定
- 只今、座頭の鍼灸治療について史料を調べています。

○高久 彩

- 論文「明治政府の博物館政策と国家像——帝国博物館に至る列品分類の変遷の観点から——」（『文化政策研究』第14号、2021年4月刊行予定、査読あり）、概要：明治期の「博物館」（東京国立博物館の前身）と列品（収藏品）の制度化過程、とりわけ列品分類の変容に着目し、明治政府の博物館政策が、産業振興や大衆教育を目的とした英国のサウス・ケンジントン博物館から、欧州大陸の宮廷コレクションに基づいたミュージアムをモデルとする政策へ転換した経緯を検討した。本稿は、2014年に参加した ICCPR（The 8th International

Conference on Cultural Policy Research（ドイツ・ヒルデスハイム大学）の報告原稿に加筆修正を加えたものである。

- 2021年度は、博士論文に係る作業を進めつつ、本研究課題「日本の見世物における障害者」について、19世紀中頃における民間信仰や迷信に基づいた価値観などの観点から障害者と見世物との関係を考察し、見世物という「博物館」の周辺における諸問題や「博物館」における科学性と見世物的要素について検討を進めたい。

○高野 信治

- 「近世日本の国家・社会と〈障害者〉」『歴史評論』842号、45～56頁、2020年6月。第53回大会「変貌する国家と個人・地域／国家と個人・地域の歴史的諸相」報告の原稿化。分析史料の希少性が問題ながら、障害者を国家や社会における個人と捉える視点の重要性を指摘。
- 『佐賀県近世史料』第十編第七巻〔宗教編〕（高野

責任編集・解題）2021年3月。777頁。本尊が信仰厚い者のために目を痛める故事（「圓應禪寺記」武雄市富岡。成立年次不詳）などは身代わり信仰の一種だが、このような信仰故事解析は障害・疾病認識にも繋がろう。

- 2021年1月23日、樋原裕二氏「大阪における前近代障害者史研究の成果と課題——生瀬克己の研究

を事例に——」第67回大阪社会福祉史研究会（オンライン）に、本科研メンバーの東昇氏、藤本誠氏と参加。近世障害史研究に足跡を残した生瀬を

軸とする全体的な検討・分析は知見大で、当方の研究史認識への批判もなされ、より広角の視野の必要性を感じた。

○瀧澤 利行

- 1) 瀧澤利行：学校保健の原理・歴史研究総論 —— 原理・歴史研究は現実の何に役に立つか ——、学校保健研究、第62巻1号、2020年4月、63頁～67頁
- 2) 瀧澤利行：学校保健における原理・思想研究の意義と課題、学校保健研究、第62巻3号、2020年

8月、205頁～211頁

- 3) 瀧澤利行：日本学校保健会100年の軌跡とその意義、学校保健の動向 令和2年度版、公益財団法人日本学校保健会、2020年11月、21頁～28頁

○中村 治

- ・著書
中村治『岩倉精神医療史散歩』、医療法人三幸会、2021年2月、全13ページ。
- ・論文
中村治「北岩倉大雲寺」、『精神医学史研究』vol.24,

no.2、2020年11月、pp.170-174。

中村治「南方熊弥と岩倉」、『熊楠楠研究』2021年3月、pp. 113-116。

○東 昇

- ・今年度はデータベースに関する分析を行ない、生瀬克己『近世障害者史料関係集成』のデータ化を進めた。収録年代は慶長9年（1604）～明治3年（1870）267年間、616件、これを史料別、採録史料集別に二つのデータを作成した。各史料別の項目は、史資料名、年月日、綱文（内容概略）、出典、刊行物名の他、新たに地域、キーワードを追加した。また史料集では、採録された史料別に件数を数えたもので、史料名、件数、編者、刊行者の他、刊行年、巻数等を加えた。
- ・史料分析、『京都町触集成』から、京都の町触のな

かで本研究に関連する資料の目録を作成した。また肥後天草、伊予大洲藩、丹後田辺藩等の孝子褒賞関連史料等を調査中。

- ・2021年1月23日第67回大阪社会福祉史研究会において、樋原裕二氏の「大阪における前近代障害者史研究の成果と課題——生瀬克己の研究を事例に——」報告に参加した。樋原氏は、研究対象としている生瀬克己氏の研究業績など、全体的な検討・分析を実践されており、多大な示唆・御教示を得ることができた。

○平田 勝政

- ・著書として、渡部昭男・國本真吾・垂髪あかり編・糸賀一雄研究会著『糸賀一雄研究の新展開～ひとに生まれて人間となる～』（三学出版、2021年2月発行）に「(コラム4) 糸賀一雄を学び、より深めるために～優生思想を超えて～」(223-237頁)を

執筆した。当初は「糸賀一雄のヒューマニズムと発達保障～優生思想を超えて～」とのテーマで寄稿予定であったが、コロナ禍と校務の影響で果たせなかった。コラムでは学生時代（二十歳前後）における糸賀著作との出会いから上記テーマを設定

するに至る過程を記した。今後は本科研の担当テーマの一環として<糸賀一雄における障害者の人権保障思想の形成過程と到達点>を執筆していく予定である。

- 論文としては、ハンセン病者の人権を左右する隔離監禁主義と治療解放主義の相克過程の解明作業を「朝鮮」に注目しておこない、下記の拙稿（単著）を発表した。

「1920年代の朝鮮におけるハンセン病問題に関する研究——志賀潔における治療主義と隔離主義の相克——」『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』第19巻第1号、pp.73～86、2020年12月

- 研究活動としての資料調査（出張）はコロナ禍ですべて中止を余儀なくされ、下記の文献資料集を購入手して停滞を補った。

- ① 『編集復刻版 優生保護法関係資料集成』第2回配本（第4～6巻、六花出版、2020年5月発行）
- ② 『編集復刻版 優生保護法関係資料集成 第2期 市民運動編』第1回配本（第1～3巻、六花出版、2020年12月発行）
- ③ 『編集復刻版 精神障害者問題資料集成 戦後編』第1箱（第1～6巻）、六花出版、2018～2019年発行）

○福田 安典

以下の研究業績がある。

【著書】

- 『伊予俳人 栗田樗堂全集』（和泉書院、2020年、共著、2020年度文部科学大臣賞）
- 『医学・科学・博物 東アジア古典籍の世界』（勉誠出版、2020年、共著）
- 『説話文学の最前線』（説話文学会、文学通信、2020年）

【論文】（前号報告以降）

- 「名医伝と藪医譚との間」（『国際日本学』第一七号、査読なし、pp 5-28、2020年3月、査読なし）
- 「井上蝶庵『連歌提要』と上田秋成」（『上方文藝研究』第17号、2020年7月、pp53-62、査読あり）

【付記】

以下の資料を入手した。



資料名 菅田版一枚刷り「少彦名神社周辺」

概要 少彦名は医術、温泉に関わる信仰を持つ。当然、愛媛にも複数の伝説がある。道後湯神社では大己貴と少彦名が伊予国にやってきた時、突然苦しみ始めた少彦名を大己貴が温泉湯で治療し、それが道後温泉の縁起とも関わって語られている。回復した少彦名はその上で跳ねて喜んだとされる石が「玉の石」である。道後が「神の湯」と称される伝承の一つである。後に少彦名と大己貴は大洲に移動、新谷や菅田に住んだので今も神南山の名がある。ところが、少彦名は肱川で溺れる。「冠岩」「宮ヶ瀬」の地名がある。その少彦名を祭った少彦名神社は江戸期には大洲藩によって不入山と決められた神聖な場所であったとされている。

少彦名神社を描いたこの一枚刷りは慶応頃の出版だと思われるが、何よりも「菅田里有志施板」とあって貴重な菅田版印刷物なのである。地方版の研究が進んでいない中、菅田版の存在は今まで知られていない。また「喜多郡常磐町彫工 岡田直信」の名があり、当時の伊予の出版人の実名が判明する点も貴重である。

和歌は「あま雲の梁瀬のみねは神代より少彦名のゆかります山」、作者は稜威道別、大洲の山中幸忠であろう。山中幸忠は『大洲名所図会』の刊行を目指したが叶わなかったとされてきた。少なくともその一部は刊行された事実が確認できる。

○藤本 誠

- ・論文『『東大寺諷誦文稿』の再検討 ― 病者(障害者)・路辺遺棄者・貧窮者等を中心として―』(『日本仏教総合研究』18号、15~40頁、2020年9月)
- ・論文「古代の説法・法会と人々の信仰」(伊藤聡・佐藤文子編『日本宗教の信仰世界』〈日本宗教史5〉、吉川弘文館、39~68頁、2020年12月)
- ・学会報告『『日本霊異記』の成立と東アジアの仏教』概要：本報告では、第一に『日本霊異記』の仏教的世界観が、平安前期に成立した法会の説法の手控えと関わる史料とされる『東大寺諷誦文稿』の仏教的世界観と同じ構造を有し、内的にも連関していたことを指摘し、薬師寺僧景戒による『日本霊異記』の編纂とは、説法で語られた仏の真実の言葉を集める宗教実践であったことを推測した。第二に、中国仏教説話・僧伝の序文と写経題記の

内容との比較考察から、景戒は『日本霊異記』の編纂について、写経に並ぶような浄行と位置づけていた可能性が高いことを推定し、このような古代日本の仏教書の高い位置づけは、古代日本固有の歴史的背景に規定されたものであり、中国における説話集のそれとは異なることを指摘した。

- ・宗教史グループの活動の一部として、古代・中世の疾病観の論文リストの作成を継続していく。
- ・2021年1月30日に、宗教史グループの細井浩志氏・小山聡子氏と、論文リストの打ち合わせを行った。
- ・2021年度は、2020年度に進めてきた古代仏教説話データベース入力の結果を踏まえ、『日本霊異記』や『東大寺諷誦文稿』の障害表現に影響を与えたと考えられる、中国仏教説話の構造と表現の分析を進めていきたい。

○細井 浩志

- ・共著
細井浩志編、新陰陽道叢書第一巻古代、1~34頁「総論」、37~72頁「陰陽道」概念と陰陽道の成立について(名著出版、大阪府)2020年
- ・学術論文(論文集や編著への寄稿を含む。いずれも単著)
 - 1) 天文異変と史書の生成 ― 舎人親王の作品としての『日本書紀』、山下久夫・斎藤英喜編、『日本書紀』1300年史を問う、22-46頁(思文閣出版、京都市)2020年
 - 2) 奈良・平安時代における星辰・暦神信仰の展開と仏教との関係の一側面 ― 僧侶の天文書学習の問題と人魂信仰について、木本好信編、古代史論聚、521-538頁(岩田書院、東京都)2020年
 - 3) 『日本書紀』の暦日について、季刊悠久、161号、73-88頁(鶴岡八幡宮、神奈川県)2020年
- ・その他の業績
 - 1) 坂上康俊・永山修一・堀江潔・細井浩志・末松剛・森哲也・山下洋平・柴田博子・田中健一、史学雑誌 2019年度の歴史学界 ― 回顧と展望 ―、129編5号、担当箇所47-52頁(史学会、

東京都)2020年

- 2) 細井浩志、小口雅史編『古代東アジア史料論』、六一書房書評リレー
https://www.book61.co.jp/book_review.php/150
(2021年1月13日公開)
 - 3) 陰陽道の世界観と時間、日本暦学会、27、1-11頁(日本暦学会、滋賀県)2020年
- ・取材等
 - 1) 長崎新聞「遺跡は警告する4 ― 疫病篇 ― 大仏建立」コメント、2020年9月20日(共同通信の取材による。このほか室蘭日報、東奥日報、信濃毎日新聞、岐阜新聞、紀伊民報、中国新聞、高知新聞、愛媛新聞などに掲載)
 - 2) NHK プレミアムコズミックフロントNEXT「いにしへの天文学者 安倍晴明」取材協力(2020年11月26日放送)
 - 3) 「呪いで欠席? 遅刻も当たり前! 時間にルーズだった平安貴族に学ぶ」現代サラリーマンの働き方、和楽(WARAKUWEB 読み物) <https://intojapanwaraku.com/culture/137806/>(講演の取材記事)、2021年1月14日公開

4) 中国新聞「遺跡からの警告——疫病編——」コメント、2020年11月29日（共同通信の取材による）

・2021年1月30日、宗教史グループで小山聡子氏・藤本誠氏と文献目録の話し合い（Zoom）。

○丸本 由美子

2020年度は疫病対応にほとんどの時間と労力、思考力を吸い取られた観がある。12月の当科研研究会での報告が、わずかな研究実績であった。

オンラインでの講義や報告に多少なり慣れたことが、今後につながる今年の成果であろうか。

但し、現況は「疫病に端を発する生活困窮者に対して為政者がどう対応するか」という、困窮者扶助

に関する制度史をフィールドとする筆者にとっては、非常に生々しくかつ興味深い現在進行形の「歴史」でもある。

これが10年後にどう評価され、100年後にいかに伝わっているか、あとうことならばこの目で確認してみたい。

○山下 麻衣

2020年度は1本の研究ノートと1本の論文を発表した。

(1) 研究ノート

山下麻衣・藤原哲也・今城徹（2021）「矜持と労苦——傷痍軍人とその妻の戦後経験——」『障害史研究』第2号、2021年3月、79-97。

この研究の目的は、奈良県立図書情報館「戦争体験文庫」に所蔵されている傷痍軍人会が発行していた沿革誌の概要を明らかにすること、第二次世界大戦後に戦傷病者とその妻が直面した労苦の内容を分類する手がかりを掴むことである。主として、青森県、群馬県、滋賀県の文献を分析した（山下は群馬県を担当した）。分析の結果、第二次世界大戦後における戦傷病者とその妻に特徴的な労苦とは、戦地に行く前後の職業生活のギャップ、生計維持のための妻の多様な役割、継続的な医療サービス需要の必要

性であった。この知見をもとに、筆者は本科研で更生医療の構造を今後明らかにしていく予定である。

(2) 論文

山下麻衣（2020）「明治期における急性感染症患者の看護：東京府（市）立駒込病院を事例として」『同志社商学』72（1）、65-86。

本論文では主に東京の駒込病院を事例として、看護を担う者が明治期日本の感染症の流行によって雑用を担う者から知識を持つ専門職に変貌していく過程を考察した。第1に1904年に駒込病院で看護婦の養成制度が誕生した大きな理由は院内感染対策にあったことを明らかにした。第2に駒込病院では院内感染を防ぐ目的で、看護婦の職階制度が誕生したことを実証した。筆者は障害者史と看護史をどのように結びつけていけば良いのかを引き続き考察していく。

○山田 巖子

・「カタリとハナシ」岩本通弥編『方法としての〈語り〉——民俗学をこえて』ミネルヴァ書房 2020

ドイツと日本の「日常の語り」を研究する方法論とその研究史を概観した論文集の中で日本の「口承」研究の方法を論じた。神話や伝説のモチーフや古い語彙が別の文脈を得て同時代的な意味を獲得していく「再文脈化」の現象として多様なマ

イノリティが「障害者」として収斂していく「福子」の論文を紹介した。

・国立歴史民俗博物館小池淳一とともに青森県の在野の研究者佐々木達司氏の遺稿『青森県俗信辞典』の補訂を行った。「迷信打破」など多様な目的のために収集された資料集からも「俗信」が収録されており、「出産」と関わるものも多く含まれてい

- る。「胎教」などの議論と重ね合わせて考えたい。
- ・障害史研究データベース「文化史班」のひな型を

- 作成。文化史班で議論を深めていく。
- ・「生命の弁別再考（仮）」と題する論考を準備中。

○山本 聡美

- ・論文「疫病と美術——日本中世絵画に描かれた疫鬼」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第66輯、2021年3月、査読なし）
- ・コラム「「方丈なる庵室」と陀羅尼の靈験」（和歌山県立博物館編『粉河寺縁起と粉河寺の歴史』展図録、2020年10月）
- ・書評「人間への絶望と信頼」：阿満利磨著『『往生要集』入門——人間の悲慘と絶望を超える道』書評（『ちくま』599、2021年2月、Web ちくま2021年2月4日公開）
- ・COVID19による疫禍の中で、古代・中世日本美術と疫病に関連した講演やメディア取材の続いた一

年であった。「疫病をこえて人は何を描いてきたか」（NHK日曜美術館2020年4月19日）、「疾病の日本史②中世に学ぶ」（『日経新聞』2020年6月30日朝刊）、「Japan vs Pandemic」（NHK WORLD-JAPAN, Japanology Plus, 2020年8月18日）、「ラジオ深夜便・私のアート交遊録「疫病とアート」」（NHKラジオ、2020年11月25日）など。未曾有の感染症流行に直面した社会で、古典知や人文知を活用することへの期待や要望が高まる中、美術史研究者は、過去の造形を通じていかなるビジョンが提示できるのかについて、深く考える一年でもあった。

○吉田 洋一

- ・2020年10月15日、「北部九州における儒者・医者関連の事例検討（著作物なども含む）」といった内容で、大島明秀氏と打ち合わせ（熊本）。

- ・西日本新聞・筑後版（2020年10月25日付）取材「住人十色」（「医者のまち」歴史を見つめ）。